



重要文化財 金剛峯寺 大主殿の大玄関の欄間の彫り物  
 高野山は古来火災が多いため、水神の象徴である龍を意匠に取り入れ、焼失から守ることを願いました。

# 霊宝館だより

題字・畚野光義師

霊宝館だより 第145号

令和6年2月11日発行  
 和歌山県伊都郡高野町高野山306  
 公益財団法人高野山文化財保存会  
 高野山霊宝館  
 電話0736-56-2029  
 URL <https://www.reihokan.or.jp>

## 利用案内

<b>■ 開館時間</b>	5月1日～10月31日 8時30分～17時30分 11月1日～4月30日 8時30分～17時00分
<b>■ 休館日</b> 年末年始 (展示替えに伴い臨時休館あり)	
<b>■ 拝観料</b>	大人 1300円 高・大学生 800円 小・中学生 600円 高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。 (住所記載の証明書提示要)
<b>■ 専用駐車場あり</b>	

## 令和5年度 冬期平常展

# 「密教の美術」 ～祈りの龍姿～

令和6年1月20日(土)～  
4月14日(日)

## 第145号 目次

冬期平常展のご案内	2～3
収蔵品の紹介114	4
高野山の古建築 第四十二回	5
特集高野山	6～7
高野山霊宝館からのお知らせ	8

毎月21日(弘法大師の日) ご来館の方にプレゼント差し上げます。



国宝附属 阿耨達童子像  
(八大童子立像の内) 金剛峯寺



重文 厨子入金銅水神像 金剛峯寺

特別公開



国宝 仏涅槃図 金剛峯寺  
公開日【令和6年2月10日～3月3日】

令和5年度 冬期平常展

「密教の美術」

「祈りの龍姿」

令和6年1月20日(土)～4月14日(日)

前期 1月20日(土)～3月3日(日)

後期 3月5日(火)～4月14日(日)

会期中無休

令和六年の干支は辰（龍）年です。龍は密教、弘法大師空海、高野山にとって、非常に関係が深いものです。そこで今回の展覧会では、龍にまつわる文化財を展示し、それぞれとの繋がりを紹介します。さまざまな龍の姿をお楽しみください。

また、本館では令和六年（二〇二四）で没後一〇〇年となる富岡鉄斎のゆかりの宝物や、「国宝 仏涅槃図」（期間限定）などを展示します。

主な展示品

絵画

国宝 仏涅槃図

金剛峯寺

国宝 善女龍王像

【2月10日～3月3日】  
金剛峯寺

重文 十巻抄

【3月16日～4月14日】  
円通寺

重文 覚禅鈔

【前期・後期で巻替】  
釈迦文院

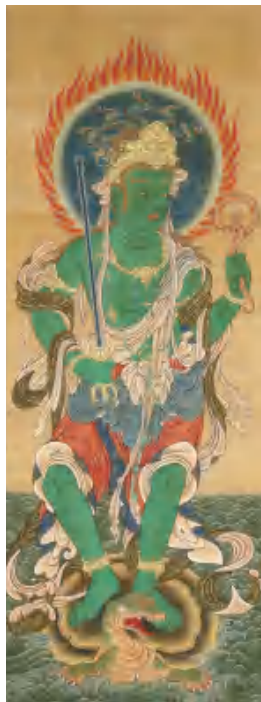
不動明王二童子像 俱利伽羅龍劍  
十二天像のうち水天像・風天像

【前期・後期で巻替】  
金剛峯寺  
成慶院

特別公開



国宝 善女龍王像 金剛峯寺  
公開日【令和6年3月16日～4月14日】



十二天像のうち水天像 成慶院



龍頭 金剛峯寺



重文 奥之院出土品のうち青白磁竜首水注 金剛峯寺



龍王権現像 金剛峯寺

県指定 白衣観音雲龍図 宝寿院  
山水図（餐水喫霞図）「富岡鉄斎筆」 金剛峯寺【後期】  
不動明王立像「富岡鉄斎寄付」 金剛峯寺【前期】  
南山宝刹図「富岡鉄斎筆」 霊宝館  
撥雲尋道図「富岡鉄斎筆」 霊宝館

彫刻 国宝附属 阿耨達童子像（八大童子立像の内） 金剛峯寺  
龍王権現像 金剛峯寺

書跡 国宝 紺紙金銀字一切経（中尊寺経） 金剛峯寺

重文 紺紙金字一切経（荒川経）【前期・後期で巻替】  
「放光閣」 「富岡鉄斎筆」 金剛峯寺【後期】  
浄菩提院

工芸 重文 厨子入金銅水神像 金剛峯寺  
龍頭 金剛峯寺  
唐縫打敷 金剛峯寺  
九針杵 金剛峯寺  
九針鈴 金剛峯寺

考古 銅鏡「富岡春子寄進」 金剛峯寺

重文 奥之院出土品のうち青白磁竜首水注 金剛峯寺

※文化財の保存上、展示品が替わる場合があります。  
◎期間中、一部展示替えを行います。

次回の展覧会予告

令和六年度 春期企画展

「(仮)金剛峯寺とその成り立ちと宝物」

令和6年4月20日(土) ～ 7月15日(月・祝)

収蔵品の紹介 114

重要文化財 金銅水神像一軀

金銅製 室町時代（十五世紀） 金剛峯寺蔵

昔から龍は水神の象徴とされ、雨乞いの祈禱等に祀られました。弘法大師空海が神泉苑（京都の宮中の池）で雨乞いをし、善女龍王の力を借りて雨を降らせた話もあり、高野山や大師も龍との関係が知られます。今回紹介する金銅水神像は、金色



岩座の背面板の墨書

に輝く龍の姿をした水神像です。型に融けた金属を流し込み造られた金銅製の像で、鱗や髪の毛を非常に細かく彫り出しています。右手に宝珠を持ち、首を大きく曲げて、口を大きく開け見下ろす姿は、小さい像ですが力強さを感じます。龍の下にあるうねうねしたものは飛雲で、全体で飛雲に乗る龍を表現しています。この水神が納められている厨子の中には木製の岩座があり、岩座の上に飛雲に乗る龍が納められて完成です。水神像だけ鎌倉時代の作であるという説もありますが、一般的に、十五世紀、室町時代の像とされます。

岩座の背面に貼っている板にもう

少し情報があります。板には墨で「青龍雨師明神 快龍院 圓海」という文字が書かれています。「青龍雨師明神」のうち「雨師明神」は、

雨を降らせたり、止ませたりする神さまで、この水神像もそういう祈りの対象だったのでしょう。「快龍院」という寺院は残念ながら不明です。「圓海」という僧侶は、おそらく奉納者ですが、その名前の僧は高野山

関連の史料に散見されます。その中の一人に、室町時代に奥之院一の橋（大渡橋）の修理に尽力した圓海という僧がおり、この二人の圓海は同一人物ではないかとの説があります。

鎌倉時代の史料『高野山秘記』や江戸時代の史料『紀伊統風土記』などによると、一の橋の下に龍穴（龍水神のすみか）があったと記されています。圓海が一の橋を修理した際の供養願文（現存せず、一部だけ『紀伊統風土記』に引用）にも、龍

穴についての記述があることから、圓海もそのことを知っていたようです。このように、龍・水に関連

することから、一の橋を修理した圓海と、金銅水神像の圓海は同一人物の可能性があると見られます。ちなみに、一の橋修理の圓海は箕面山（大阪府箕面市）の十穀聖で、高野

山の僧侶でないようです。そうすると、先の「快龍院」も箕面山の寺かもしれません。

では、二人が同一人物である前提で論を進めてみましょう。圓海による一の橋の修理は、江戸時代の史料『高野春秋編年輯録』（以下『高野春秋』）によると明応二年（一四九三）に行われ、国宝『又統宝簡集』に納められている「高野山檢校帳」によると、寛正四年（一四六三）に行

われたとされています。二つの史料で矛盾が生じているわけです。実は、『高野春秋』の記述は、室町時代を中心に約三十年のズレがあることが、中野達慧師、和多秀乗師などによって指摘されています。詳しくは省略しますが、今回も寛正四年が正しいと考えられます。そのため、水神像の制作年代も寛正四年頃ではないかと推測できます。

水神像は、享保二十年（一七三五）に作られた「御影堂靈宝目録」（国宝『又統宝簡集』所収）に「青龍雨師明神」と記され、この頃御影堂にあったことがわかります。しかし、その他に史料がありません。それまでの経緯は推測を重ねることではかわからない、非常にミステリアスな龍神さまなのです。

（研谷 昌志）

連載

高野山の古建築

普賢院本堂

第四十二回

鳴海 祥博



本堂内部の全景 本堂は三間四方で、中央の須弥壇にご本尊が祀られている。一見したところ典型的な仏堂の空間構成で、東照宮の拝殿とは思えない。



本堂の外観 正面中央に唐破風造りの向拝が付き、軒下部分は豪華な彫刻で飾られている。本堂の左右には、一間奥に後退して「脇陣」といえる建物が接している。



上：天井の折り上げ部分 漆塗りの上に桐唐草紋が金泥で描かれている。その流れるような筆致は美しい。  
下：内法長押の彩色 金地に金泥で蓮唐草紋が描かれている。このような彩色技法は特筆できる。  
以上の彩色は全国的に見ても特異で珍しく、注目である。



本堂の天井 「二重折り上げ小組格天井」という形式で、漆塗り、金色の金具で装飾されている。これだけ格式高く豪華な天井は高野山内には他に無いだろう。東照宮拝殿の遺構であることを確信させる意匠である。

普賢院は千手院橋交差点の北東にある寺院で、西の大通りに面している楼造りの正門を入ると、正面奥に本堂があります。明治二十一年（一八八八）三月、寺院五〇カ寺、町屋一二三軒を焼き尽くす大火災が発生し、普賢院も類焼しました。普賢院では、火災後の復興に際して、「行人方東照宮」の建物の払い下げを受け、東照宮の拝殿を本堂としたと伝えられています。「行人方東照宮」は現在の本山金剛峯寺の西北裏山に、寛永八年（一六三二）に創建されたのですが、明治になって廃絶し、当時は廃屋となっていたようです。普賢院本堂は果たして行人方東照宮の拝殿だったのか、その様子を確かめてみたいと思います。

本堂は三間四方で、正面には唐破風造りの一間の向拝が付いています。その両脇には、本堂正面から一間分奥に入り込んで、脇陣が接続しています。さらにそれらの奥には位牌堂が繋がっていて、とても複雑な平面となっています。本堂の外観は白木造りで、向拝を中心にさまざまな彫刻で飾られています。これらの彫刻類の様式的な年代観としては、幕末から明治期のものと思われる。内部は一面に鮮やかな彩色が施されています。特に「オランダ群青」と称される群青色が印象的です。これは幕末期に輸入された顔料で、彩色の年代判定の指標とされています。つまり内部の彩色は幕末期以降のものだと判断できそうです。ただし内法長押は金地に金泥で文様が描かれていたとしても珍しいもので、幕末頃のものとは思えない逸品です。

本堂部分の天井は「二重折り上げ小組格天井」という最高格式のもので、しかも漆塗りで仕上げ、金色の鍔金具が打ち付けられています。このような意匠の天井は、山内では寛永十八年（一六四二）に竣工した徳川家霊台以外には無いと思います。この天井を見上げたとき、「行人方東照宮」の拝殿を移築したという伝えに確信を抱きます。行人方東照宮の拝殿は、古絵図を見ると横長の長方形平面の建物で、正面に唐破風の向拝が付いています。金剛峯寺に残されている古図面では、桁行九間、梁間三間で、正面に三間の向拝が付いた姿となっています。それと現在の普賢院本堂の平面を見比べると、明らかに異なります。山内の寺院では、本堂の側面に本堂正面から一間後退して位牌堂が接続している例が多く見られます。普賢院本堂の構成は、他の山内寺院の本堂の構成と基本的に同じです。つまり、本堂再建に際して、行人方東照宮の拝殿をそのままの形状で移築したのではなく、山内寺院の本堂としてふさわしい姿に大幅に変更したと思えるのです。本堂には丸柱と角柱が混在しています。これは普通には考えられないことで、丸柱は拝殿のもの、角柱は再建時の新材ではないかと想像します。その他、内法長押や小組格天井など部分的に拝殿の部材を再用したように思えます。普賢院本堂は、行人方東照宮拝殿の部材を用いて、全く異なった姿に再建したもののようです。それにしても、これほど巧妙に違和感なく建て上げた当時の大工さんの技量には敬服します。部分的であれ、東照宮拝殿の面影をとどめている普賢院本堂は、明治期再建の歴史遺産として、永く後世に伝えてほしい貴重な建物です。

特集高野山

国登録有形民俗文化財

高野山奉納小型木製五輪塔及び関連資料の調査（その一）

製作工程

平成三十年（二〇一八）四月十日、円通寺の本堂の須弥壇の下から発見された小型木製五輪塔は、令和三年（二〇二二）一月十五日に国登録有形民俗文化財「高野山奉納小型木製五輪塔及び関連資料」に登録されました。その後の調査で判明したことをご紹介したいと思います。

◎資料の概要

今回登録された一万二、一五六点のうち、製作途中のものが三四八点ありました。そのうち五輪塔の形になるまでの、木地作業中の未完成品が八点（写真1、2 図1⑥、⑦）、また、空輪、風輪、火輪、水輪、地輪の四面に四門の梵字が墨書されていない



写真1 製作途中の未完成品 (図1 ⑥)

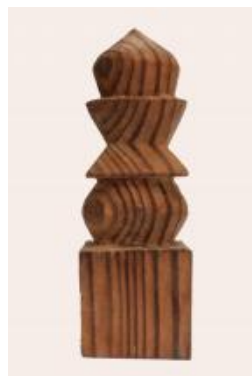


写真3 製作途中の未完成品 (図1 ⑨)



写真2 製作途中の未完成品 (図1 ⑦)

ものが三四〇点（写真3 図1⑨）、さらに施主が奉納する前、つまり施主名や戒名、これらの出身地、願意などが墨書されていない未奉納品が一、三四〇点ありました（写真6 図1⑮）。

◎製作技法と工程

これらの未完成品、未奉納品の製作痕を観察し、技法を考察すると、小型木製五輪塔の製作工程の一部が

復元できます。（以下の①から⑮の工程の番号は、図1①から⑮に対応します。）

①五輪塔の幅と奥行の規格は、一辺が約三センチ（一寸）なので、一辺約三センチ（一寸）の棒状の角材を製材します。

②五輪塔は、一木作りが基本となっています。高さは約九センチ（三寸）なので、長さ約九センチ（三寸）の木片（材木）を、鋸で切り出します（写真4）。



写真4 地輪底部に観察できる角材から切り出した痕跡（図1 ②）。鋸は四辺から中心部に向かい切り込み、中心部は最終段階で切断しています。

③五輪塔の材木。  
④切り出した材木は、火輪部分の上辺部分（風輪の下辺部分、A）、水

輪部分の上辺部分（火輪の下辺部分、B）、地輪部分の上辺部分（水輪の下辺部分、C）に、それぞれ四方から鋸で切り込みを入れます。

⑤火輪部分を、彫刻刀（平刃）で屋根状に削ります。

⑥水輪部分を、彫刻刀（平刃）で円柱状に削ります（写真1）。

⑦水輪部分を、彫刻刀（平刃）で球形に削ります（写真2）。

⑧⑥と⑦を観察すると、風輪の上辺部分（空輪部分の下辺部分）には、

④の工程で見られたような、四方から鋸で切り込みを入れた加工痕がありません。このことから、火輪部分は彫刻刀（平刃）のみで、半球状に削り出したものと考えられます。

⑨空輪部分を、彫刻刀で宝珠状に削ります。空輪、風輪、火輪、水輪の形状を、全体のバランスを見て、さらに削って形を整えます（写真3）。

⑩地輪部分の底面中央から水輪の中心部分にかけて、彫刻刀（細長い丸刃）で穴（奥行四・二センチ、直径〇・

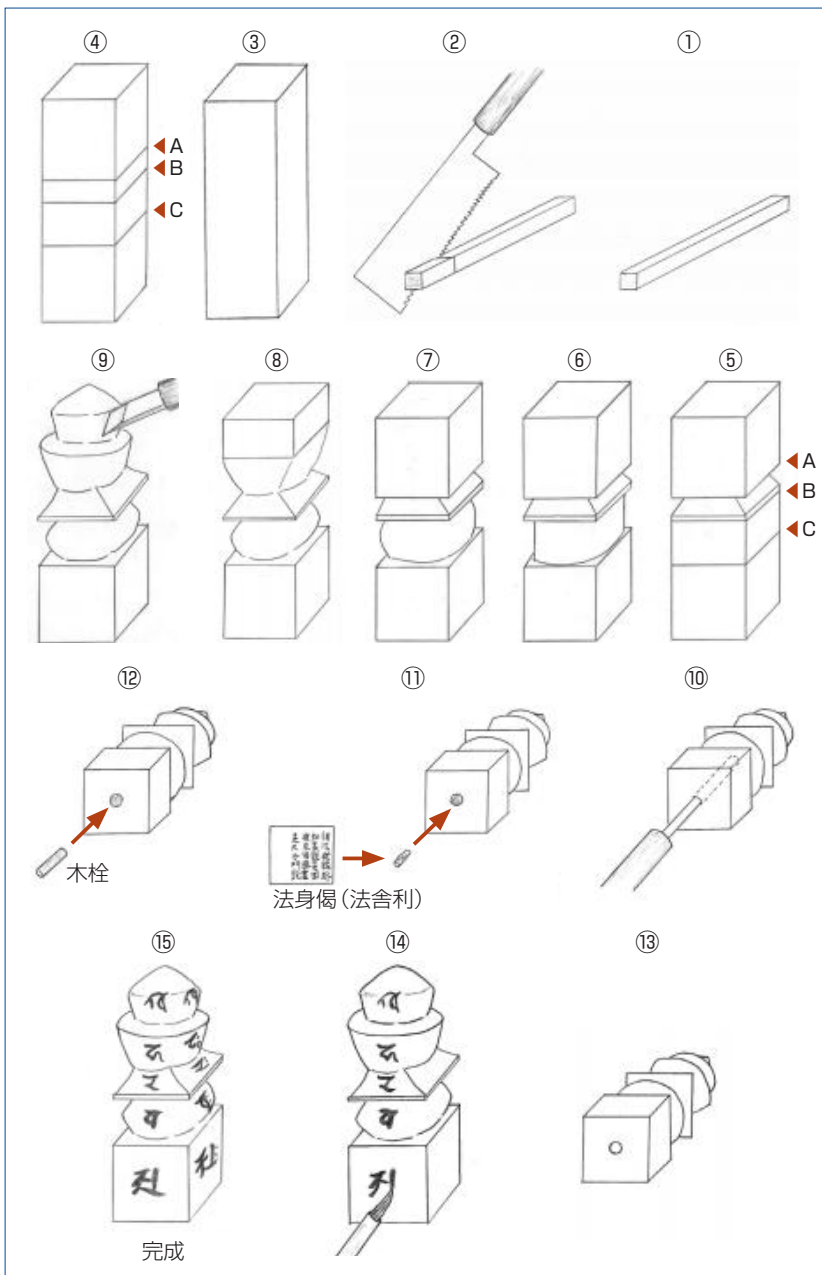


図1 小型木製五輪塔製作工程 (復元)

①紙片に墨書した「法身偈」(法舍利)を畳んで円柱状に形を整えて、地輪部分の底面中央の穴に差し込み、水輪の中心部分まで押し入れます。

②地輪部分の底面中央の穴に、円柱状の木栓(長さ一・六センチ、直径〇・六センチ)を差し込み、封入します。

③地輪部分の底面と木栓の木口との段差を無くすため、底面を平らに削ったり、また研ぎます(写真5)。

④空輪、風輪、火輪、水輪、地輪部分の四面に四門の梵字を墨書します。

◎製作者  
未成品が円通寺で発見されたこと  
以上が、小型木製五輪塔の復元した工程です。



写真5 地輪底部 中央部の穴に木栓を挿入した後、段差がなくなるように削り、また研磨しています。(図1 ③)

とで、寺内で製作をしていたことが考えられます。①から⑬(⑪の紙辺に「法身偈」を墨書する工程は除く。)の工程は、鋸や彫刻刀、特に彫刻刀を使用して空輪、火輪、水輪の曲面への成形は、細かい加工痕が全体に



写真6 完成品 (図1 ⑮)

見られ(写真7)、また奉納数は納入箱の墨書によれば、一万五、二一八点(確認されたのは一万二、一五六点)納めたことが窺えることから、円通寺の僧侶が寺院生活の合間に製作したとは思えません。かなりの熟練した木工の技術を持ち、かつ量産することができる職人の存在が思い浮かびます。

また、⑪の法身偈は、一辺がおよそ一寸(横三・二センチ、縦二・七センチ)の小さな紙片に、二十字もの小さな文字が書かれており、さらにこれらを大量に書くことは大変な労力と書写する技術が必要です。

そして、⑭で五輪塔の空輪、風輪、火輪、水輪、地輪の四面に四門、特に空輪から水輪は曲面や斜面に梵字を書写できるのは、相当梵字を書き慣れた者しかできないでしょう。

このことから恐らく、⑪と⑭の墨書は、円通寺の僧侶によるものと考えられます。

小型木製五輪塔は、木工に長けた職人と僧侶が携わり、共同で製作したものと考えられます。(鳥羽 正剛)



写真7 空輪、風輪、水輪にみる、彫刻刀による細かい加工痕

# 高野山霊宝館からのお知らせ

## ◎ミュージアム法話 開催

「ミュージアム法話」(お坊さんによる法話と展示解説)を、左記のとおり開催いたしました。

11月11日(土)

講師 高野山本山布教師

村上公教師



ミュージアム法話開催風景

## 今後の開催予定

- 5月18日(土)、6月1日(土)、
  - 7月6日(土)、8月3日(土)、
  - 9月7日(土)、10月5日(土)、
  - 11月9日(土)
- いずれも午後1時より約45分

## ◎ミュージアムトーク&お坊さん体験!!

密教法具に触れてみよう!!

左記のとおり開催しました。

10月21日(土)、11月18日(土)



ミュージアムトーク&お坊さん体験!! 密教法具に触れてみよう!! 開催風景

## ◎展覧会予定

○春期企画展「金剛峯寺とその成立と宝物」(予定)

4月20日(土)~7月15日(月)・(祝)

・出陳品

未指定 御手印縁起写 金剛峯寺

未指定 高野山壇上并寺中絵図(宝

永3年(1706)

金剛峯寺

○第44回大宝蔵展「高野山の名宝」(予定)

7月20日(土)~10月14日(月)・(祝)

○秋期企画展「高野山と世界遺産」(予定)

10月19日(土)~

令和7年1月13日(月)・(祝)

○冬期平常展「密教の美術」(予定)

令和7年1月18日(土)~4月13日(日)

## ○貸出情報

●奈良国立博物館

空海生誕1250年特別展「空海

入心」-密教のルーツとマンダ

ラ世界」

国宝 聳誓指帰 下巻 金剛峯寺

国宝 伝船中湧現観音像 龍光院

国宝 諸尊仏龕 金剛峯寺

国宝 五大菩薩像 有志八幡講

重文 釈迦如来及諸尊像 普門院

重文 両界曼荼羅図(血曼荼羅)

重文 高野大師行状図画 卷二 金剛峯寺

重文 地蔵院

重文 崔子玉座石銘断簡 宝亀院

重文 孔雀明王像 金剛峯寺

重文 他

## ○高野山霊宝館友の会文化講座

「はじめの掛け軸・巻物」

高野山霊宝館友の会では、令和5

年11月25日(土)、会員を対象とした文

化財講座を開催いたしました。

講師の高野山霊宝館館長による掛

け軸と巻物の解説が行われ、参加者

は実際に扱い方を体験しました。

参加者からは「家の掛け軸を整理

してきっちり保存します」「手指の

感覚や身体の使い方など勉強になり

ました」との感想をいただきました。

今後も高野山霊宝館友の会文化財

講座にご期待ください。



講座の様子

## ◎令和六年度 友の会会員募集

- ・会員証提示で会員本人様のみ霊宝館と金堂・大塔の拝観無料
- ・霊宝館発行の季刊誌「霊宝館だより」送付

## 〈年会費〉

一般会員(個人) 3,000円

賛助会員(法人) 30,000円

皆様のご入会をお待ちしております。

ます。